

---

# ホワイトマーク

DEG

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホワイトマーク

### 【Nコード】

N9141I

### 【作者名】

DEG

### 【あらすじ】

なんであいつがいたのか、なんで俺がいるのか。考え込む青年に彼女はただ、側にいることだけをしてくれた。

時々、他人が何を考えてるかわからなくなる。

「 は？ いきなり別れろってなんだよ！」

「だから、もうあなたのこと好きじゃなくなったって言うてんの！」

女に限った話じゃなく、この世の全て意味がわからなくなることがある。

「ああまた別の男作ってたってか！？ わあっただよ、もう俺だつてめえみたいなオンナ願い下げだよ！」

「何よそれ！？ あんたがいつつも自分のことばっか考えてるからじゃない！」

「るっせえな！ 勝手にどっか行けや！」

無力感とか胸糞悪さとか、そういうのをどっしたらいいのかわからない。

なあ、なんなんだ俺がいる意味ってのは？

「(クッソ……ツイてねえわ、マジで)」

学校でカノジヨと喧嘩別れしてから、俺は夕方の公園のベンチに踏ん反り返りながら苛立ちを吐き出した。

手に握ってるのは、高校の成績表。茶髪で不良っぽく振る舞う俺が世間に評価される数字は、別段意外でも何でもない最低ラインの間である証を俺に見せ付ける。回りくどい割に全く素直な世界だ。

「(興味ねえんだよあんなの………あークソッ!)」

同時に、さっきのアイツとのいざこざを思い出してまた無性に腹が立った。俺は成績表の紙をグシャッと潰すと、地面に向けて放り投げた。

「……………」

と、紙屑の転がったところに人の脚があった。

そこにはちっちゃい女が立っていた。学校の制服を見ると、俺と同

じ高校らしかった。そいつは俺の投げ捨てたものにチラツと目を遣つてから、俺の占領しているベンチに来てわざわざ俺な隣に座り込んだ。

「元気なさそうだね」

「……あ？」

女は俺の顔を見てそう話し掛けた。いきなり赤の他人に、しかも俺みたいな不良に話し掛けるこいつの神経はどうかしてると思った。

でもそれも、彼女の真っ白な髪の色を見た瞬間に忘れた。白髪どころじゃない、完全に脱色していた。

「何……お前その髪？ フトーコー？」

「そうだけど」

何を悪びれる様子もなく白髪女は答えた。なんでそんな態度でいられるのか不思議で、俺はなぜかイラツとした。

「は、何認めてんの？ 引くわ。っーか話しかけんなよ」

「私が誰に話し掛けようと私の勝手だもん」

「あ？」

俺はさらにモヤツとしたものを感じた。なんでこんな開き直れるのか、意味がわからない。この白髪女を殴りたくなつたが、流石に女だから止めた。俺はむしゃくしゃしたまま立ち上がってこいつから

離れようと思った。

「ねえ、私の名前わかる？」

「……フトーコーの名前わかるわけねえし」

「2年2組のシロノって調べたらあると思うよ」

ピクツと一瞬だけ俺は反応したが、なぜだか振り返る気にならずに無視して歩いて行った。

シロノ？ 聞いたこともない名前だった。俺は2年2組なのにも関わらずだ。

まさか幽霊に目エつけられたんじゃないかと俺は少し不安になり、翌日クラス名簿を開いてヤツの名前を探してみた。

『出席番号12番 白野 未来』

とりあえず、名前を見つけて俺はどこか安心した。ちゃんと実在する人間だった。

しかしあんな目立つヤツなのにクラスでは、いやこの学校ですら一度も見かけた記憶はない。一体いつから不登校になってるんだろうか。

どうでもいいとは思ったが、どこと無くこのシロノに対する好奇心が俺の中に湧いた。

そしてその日も俺は一人ですることもなく、夕暮れ時の公園でふて腐れてた。普段なら遊び仲間と街に繰り出すところだが、気分が乗らなかった。

「あ、今日もいた」

「…………チツ」

それはこっちのセリフだと返してやりたかった。好奇心があったとはいえ、やっぱり何かあの白髪女を拒む気持ちが勝っていた。

「お前さあ、なんなの？ フトーコーだからやることねえの？」

「あるよ。こっうして誰かと話すの」

「はっ…………意味わかんねーし」

シロノの放つ一言一言は、まるで俺の中に無遠慮に入り込んでくるようで、それが無性に腹立たしかった。

シロノは昨日のように躊躇なく俺の側に腰を下ろした。そして今度は静かに尋ねてきた。

「私の名前まだあった？」

「…………ああ」

「そう。変なの」

変なのはお前だと俺が言う前にシロノが続ける。

「名前なんていうの？」

「は？」

「あなたの名前」

答える義理はないと思っただが、はねのけるつもりにもならなかった。癩に触った俺は、制鞆の横に書いてある汚い字を乱暴に彼女に示した。

「ク、サ……なんて読むの？」

「草剪クサナギだよ！ バカかお前、だからフトーコーになんだよ」

「ふーん、クサナギ」

シロノは俺の当て付けを完全に無視し、俺に顔を近づけてきた。思った以上に痩せて白い顔だった。

「クサナギはなんで元気がないのかな？」

「……オメーに関係ねえだろが」

俺は少しシロノをからかってやるつもりで、いきなり彼女の細い体を強引に寄せた。



「お前レイプ願望でもあんの？ よく見りゃけっこー顔も……………」

「……………」

間近に迫ったシロノの眼は、俺の眼を真正面から捉えて離さなかった。俺は息を飲んで、一瞬本気で恐ろしくなった。気がついたら、俺の方からシロノを放して身を引いていた。

「何にもしないの？」

「るっせえな、お前じゃ欲情しねえんだよ」

これは本当だった。一瞬、シロノが触れてはいけない別の存在にすら見えた。

「ねえ」

「なんだよ」

するとシロノは、ゆっくり立ち上がって俺の前で微笑んだ。

「ありがとね」

「……………は？」

その意味が全く理解できないまま、シロノはどこかへ去っていつてしまった。その時俺が考えていたのは、あいつの家がどこなのかとか、ちゃんと飯を食ってるのかとか、そんな馬鹿みたいなことばかりだった。

「アキラよう、今日カラオケ行こーぜ。女の子何人が誘ったしさ」

その次の日も、どうも俺は気楽に遊ぶ気分にならなかった。

「……いや、いいわ」

「んだよ、お前まだ浮気されたの根に持ってんのか。女なんてそんなもんだって！」

そんなもん、か。ホントはわからないくせに。

「ワリ、ちょい気分悪くてさ」

「まあいいけど……あいつ最近ノリわりいな」

そして、同じ場所へ向かう。まだ夕方じゃない公園は子供が遊んだりしていてやかましかった。

「（……何やってんだ俺。フラれたから女欲しいってか？）」

正直こんな場所に来る意味はこれっぽっちもないが、半ばヤケになった気で俺はいつものベンチにいった。すでに先客がいたが、俺のちやらちやらした恰好を見たオバハンは俺が近づくなり自分から席を空けた。

やっぱり何もすることはなく、俺はポーツとしたまま何かを待っていた。自分でここにいるのが馬鹿らしかった。

「（アホくさ……）」

ようやく夕暮れ時が近づいてきたが、俺はもう帰りたくなかった。ついでに飲み物でも買おうと思って、近くの自販機まで行った。

「（なに期待してんだ俺……？）」

まだぼんやりしながら金を入れる。

が、俺がボタンを押すより前に不意に横から人差し指がのびてきた。

「これ飲みたいなあ」

「……」

シロノが俺の脇から手をのばしていた。いつの間に現れやがったんだ。

「ガキがお前……これミルクケーキじゃん」

「おいしそう」

シロノはそう言いながら俺の目を見上げる。なぜか逆らえなくなつた俺は、舌打ちしつつシロノの指しているボタンをガコンと押さえつけた。

それで俺はまた公園に連れ戻され、まんま子供みたいにミルクセーキを嬉しそうに飲むシロノの横でため息をついていた。

「はー、おいしー。生きててよかったあ」

「アホだろお前……人に奢らせやがって」

にへら、と心底幸せそうにするシロノはとても病んだ不登校児には見えなかった。かと言って普通の奴とも違う。たかがジュース一杯でどうしてそこまで幸せになれるのか全く理解できない。

と、シロノはベンチの前に群がる鳩に視線を移した。

「おいでー」

そしてその集団に近づいていく。当然、鳩の群れはシロノが近づくなり一斉に飛んで逃げてしまった。

「あー。逃げちゃった」

「当たり前だろが」

シロノはしかし、戻ってくると何の苦もないように言った。

「きつと私がまだ生きてるからだろうね」

「……」

なんended。なんでそんなこと平気で言える。

「どうしたのクサナギ？」

「お前さ……なんか嫌だとか悔しいとかねーの？」

こいつを見ていると腹が立つ。それは俺みたいな悩み事を、こいつは何にも持っていないように見えるからだ。

「たまに……わかんねんだよそういうの。自分が何してーのか、なんで生きてんのかっつーか……」

なんで俺はフラれるのか。なんで俺は馬鹿なのか。なんでシロノは笑ってんのか。なんで俺はそのことで悩まなきゃいけないのか。いくら考えても何もわからない。

シロノはしばらく何も言わなかった。そして、俺の手が温かいものにキュツと包まれた。

「人はね、本当はみんな真っ白なの。でもさびしいから、いろんな色になりたがるの」

何かをじっと見守っているようにそう口にしたシロノの髪は、やっぱり驚くほど白かった。でも今はそれが不思議にうらやましい気がした。

「……お前はさびしくねーの？」

シロノは俺の質問には答えなかった。

ただ包み込むように俺の手を握って、ちよつとだけ笑った。

その後しばらく、シロノはいつもの公園に来なかった。俺は相変わらず仲間とつるむのも止めて、毎日公園で夕方までボーツとしていた。それでシロノが来ないと、なぜか仕事を貰えなかったみたいな妙な気持ちになった。喧嘩別れしたカノジヨのことをたまに思い出しても、あまり気にならずにいた。

「あ、クサナギ」

ゲ、と思ったのはシロノが校門に立っていた時だ。

誰も不登校児の顔なんか覚えてないかも知れないけど、それでもあいつはただでさえ目立つ。変な勘違いをされる前に、俺は慌ててシロノに駆け寄って校門から離れた。

「んだよお前、イキナリ名前呼ぶなよ！」

「ごめん、気付かないかと思って」

その髪は十分気付きやすいと言いつ返しそうになったが、俺はふと久しぶりに見た彼女の様子が気になった。

「……お前また痩せてねえ？」

「うん、そうかも。それよりちよつと来てよ」

「は？ オイちょっと」

だがシロノはそれを軽く流して、勢いのまま俺の手をグイッと引く張った。

「……ここ、着いた」

「あ？ 着いたって……」

十五分ほど近所の坂道を歩かされてたどり着いたのは、ちょうど街が一望出来るくらいの高さにある所だった。確かこの先には病院があったけど、俺はこんな場所を知らなかった。

「……お前息あがってんぞ」

「はあ……うん、いいの」

シロノは少し息を整えると、橙色の夕日が沈みかけている空の方向を指さした。

「すごくいい景色でしょ」

「……」

少し前までの俺なら、こんなありふれた景色なんてどうでもいいか、憂鬱なものに見えてた。でもシロノの細い顔の陰を一緒に見ていると、何かが違って見えた。

まるでこの景色だけが、俺のいた世界から切り取られて正しい形をしているような気がした。

「世界には境界線なんて一つもないんだよ。私とクサナギの間にも」

「……意味わかんねえし。何言ってるの？」

「別に。言っておきたかっただけ」

シロノはそして俺の側に来て、前みたいに真つすぐ、しかし穏やかな瞳をして俺を見た。

「……いつぱい生きてねクサナギ。私はいつでもどんな時でも、あなたと一緒にいるから。死んでも」

「死んで……は？ 何言ってるのマジで？ ホントわかんねえよ」

内心では、何か引つ掛かるものがあつた。でも俺は考えないようにした。

シロノははぐらかすでもなく、ただニコツとした。

「クサナギもいつか私のこと忘れるだろうけど、たまに思い出してくれたら嬉しいかも」

「んな……死ぬ人間みてえなこと言つなよ」

「さあ。じゃあ、私帰らなきゃ」



シロノはいつものようなにへつとした表情で振り向いて、また坂道を登り始めた。

「……………帰んのか？」

ぴたっ、と彼女の脚が止まる。そして今度は、淋しそうに体を振り向かせた。

「……………うん。ちょっと早いけど、帰らなくちゃ」

それは俺の直感だったのだろうか。シロノを見るのはこれで最後のよような錯覚をおぼえた。

「あなたに会えてよかった。ばいばい、クサナギ」

「……………おう」

シロノが死んだのはその二日後だった。学校でクラスの担任が唐突に、白野 未来が病気で死んだと報告した。

不思議なことに、俺はシロノがこの世からいなくなってから、シロノが最後に言った言葉の意味を実感できた。理解ではなく。

朝の口頭で、たった三分程の説明。不登校女が死んだことへの黙祷など、端から提案されなかった。

何一つ、本当に何一つが変わりない。友達は笑い、仲間と一緒に楽しそうに生きている。恋人ができたと喜ぶ。成績が良かったと自慢する。教師はいつも通りに授業をする。初めから白野 未来はいなかったかのように。

そこにはあいつの言った通り、残酷なほどに何の境界線も存在しなかった。世界はただ一つ。シロノがいた世界も、俺が過ごしていた世界も。全て本当は繋がっていることを俺は実感した。

シロノのことを誰が覚えているんだろうか。あいつはこの世界に、生きて存在していた。間違いなく俺と一緒にいた。それだけは絶対だ。

俺は自販機でミルクセーキを買ってみた。飲んでみようかと思ったが、泣きそうだったからやめた。やっぱりおいしそうには見えなかった。

するとあの公園のベンチに、俺が喧嘩別れした元カノがいた。よく見ると、一人でグズグズ泣いていた。

「どうした？」

「……捨てられたっ」

俺は元カノに、持っていたミルクセーキの缶を渡した。それから隣

に座ってそつと抱き寄せた。

それから空を見上げるといつも、どこか遠くにシロノがまだいるよ  
うな気がした。俺はいつかあいつのことも忘れるんだろうか。

そんなことはないと、言っただけじゃよかった。そんな想いが、生き  
たままのシロノの記憶と一緒に、俺の中にずっと残り続けていた。

(後書き)

衝動の所産なので粗いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9141i/>

---

ホワイトマーク

2010年10月15日18時22分発行